

# みどりアップを見に行こうツアー(調査部会)を開催しました!

市民推進会議では委員が現場を見に行く調査部会を毎年行っています。今年も「みどりアップを見に行こうツアー」と題し、一般参加者と一緒に森づくりの取組などの現場を見に行きました。今回は都筑区の、公園と公園が緑道でつながった緑あふれる街並みを巡り、愛護会や森づくり活動団体の方々、現場を維持管理する市の職員の生の声を聞きました。



樹木を一度伐採して再び芽吹かせる「萌芽更新」を行った斜面地を視察する様子(茅ヶ崎公園)

- 日時** 平成29年11月11日(土) 9時~12時
- 参加者** 一般参加者8人  
横浜みどりアップ計画市民推進会議委員9人
- コース** 横浜市営地下鉄ブルーライン「仲町台駅」~茅ヶ崎公園  
~メゾンふじのき台~大原みねみち公園~ささぶねのみち  
~都筑区役所に意見交換会

緑道をウォーキングする様子



爽いを交えた  
わかりやすい説明でした

メゾンふじのき台で説明して下さった  
住民代表の渡辺さん

## 視察内容

### 茅ヶ崎公園 「樹林地保全管理計画」を活用した森の育成の現場

市民の皆様にとって身近な緑である公園の中にも森があります。みどりアップ計画ではこうした公園の中の森の質を高める取組も行っています。公園愛護会の方で実際の活動のお話を聞きながら、身近な公園で質の高い緑を実感しました。

### メゾンふじのき台 森づくりアドバイザーの派遣を活用して維持管理する現場

メゾンふじのき台保存緑地は、横浜市と協定を結び、団地の住民が維持管理をしています。住民の代表の方のわかりやすい解説で、みどりアップ計画を活用し、工夫しながら丁寧な管理をされていることがわかりました。

### ささぶねのみち・大原みねみち公園 森づくりガイドラインを活用した森の育成の現場

整備から20年以上経過し、当初に植えられた樹木が大きく成長しすぎて、道が暗くなったり、樹木が混みあって健全な育成ができなくなっているため、これから手入れをする現場を視察し、維持管理の必要性を感じました。



意見交換の様子

## 参加者の声

- 「森づくりの取組は、みどり税を活用した良い活動なのだからもっと市民に広報した方がいいと思った」
- 「マンションによっては保存緑地があり、住民の皆さんが維持管理に汗を流されていることを初めて知った」
- 「みどり税がいろいろなところに使われていることが分かった」
- 「みどり豊かな住み続けたい街横浜のために、みどり税を今後も続けて欲しいと思った」
- 「具体的な現場の話が聞けて面白かった」
- 「散策として利用していた緑道が多くの人に管理されていたことを知った」
- 「森を守るためには、人による管理が必要であることを学校の授業で伝えたい」

公園愛護会の方にも  
ご参加いただきました

## 横浜みどりアップ計画とは?

緑豊かな環境を将来に残すために、市民の皆さんと一緒に緑を守り、つくり、育てていく計画。財源の一部として、「横浜みどり税」を活用しています(個人市民税均等割に年間900円、法人市民税に均等割の9%相当額を上乗せ)。計画書は、環境創造局ホームページ、区役所広報相談係や市庁舎1階市民情報センター、環境創造局政策課で閲覧できます。

環境創造局ホームページ  
http://www.city.yokohama.lg.jp/  
kankyo/midoriup/



## 横浜みどりアップ計画 市民推進会議とは?

横浜みどりアップ計画について評価、提案、市民への情報提供をする、市民参加の組織です。

市民推進会議

## みどりアップQとは?

みどりアップQの「Q」は「みどりアップをもっと知る、なぜなに?(クエスション)」と、「緑のある暮らしの質(クオリティー)を考える」。市民目線でみどりアップ計画を探っていく市民推進会議のレポートです。

# みどりアップQ

緑×まち×未来を考えよう

Vol.12  
Feb 2018

横浜みどりアップ計画  
市民推進会議レポート

## Q よこはま森の楽校って? 大学生と学ぶ、まちの自然

「森の楽しみづくり」をテーマに、今年も「よこはま森の楽校」が開催されました。市内の大学生が中心となって地域のみなさんに自然の大切さ、面白さを伝える試み。地域の交流から、新たな発見が広がっています。





# 地域×大学のこれから、よこはま森の楽校

大学・都市パートナーシップ協議会※に参加している大学の学生たちが、市民向けの自然体験学習を開催する「よこはま森の楽校」。7年目となる今年度も、市内各地でさまざまなイベントが行われました。

キャンパス内の森でチョウの生態を調べる東京都市大学北村研究室のプログラムは、学生が主体となって取り組んでいるユニークな試み。監修した同大学環境学部環境創生学科の北村亘講師、そして企画、運営を行った4年生の青木理紗さんにお話を伺いました。

取材：東みちよ 委員

※「大学・都市パートナーシップ協議会」  
市内の大学が豊富な知的資源などの蓄積を活かし、市民・企業・行政と連携して活力と魅力あふれる都市を実現するため創設されたもの。



森でチョウを探す前に、みんなでチョウについて学びます

**取材メモ** 横浜みどりアップ計画 市民推進会議委員が「気付いたこと」

1. 生息するチョウの種類から、都市の環境を知ることができる
2. これからは地域のみどりの“質”を考えていくことも課題
3. 大学で、まちで、環境教育を行う人材育成が必要

## チョウからわかる環境のこと

港北ニュータウンの閑静な住宅街の中に佇む、東京都市大学の横浜キャンパス。校舎裏手の森には、さまざまな鳥や昆虫が生息しています。親子で参加して自然を学ぶ、よこはま森の楽校のワークショップでは、このキャンパス内の森を使って、チョウの生態調査が行われました。

「チョウは環境の指針になり得るのです」同大学環境学部環境創生学科で生物多様性の保全を研究する北村亘講師は教えてくれました。「チョウは森、市街地、畑など、場所によって生息している種類が異なります。どんなチョウがいるかでその環境がわかるのです。今回のワークショップは、地域に公開している森が校内にあることをPRし、身近に環境教育の場があると知ってもらうことや、学生が地域の人とふれあい、教える機会を増やすことを目的に企画しました。また皆さんに楽しんでもらうため、なるべくお子さんにもわかりやすいよう、調査対象を身近なチョウにしています」と北村講師。

キャンパス内の森は、都市にありながらも生物多様性も保たれているといいます。「研究室では主に鳥類の生態調査を行っており、巣箱に鳥が入ってきたこともあります。キツツキの仲間のコゲラ、アオゲラもいます。またチョウも、草地に観られる小型のチョウや、森林性のチョウなどさまざま。横浜は緑豊かな都市ですが、生きものを通して自然を知ってもらえたら、これからは緑の質を高めることも課題です」

**ここにみどり税** よこはま森の楽校(大学主催の環境学習)のイベントの費用や広報



北村講師

## 観察する楽しさを伝えたい

ワークショップでは、まず教室で、学生が用意した実寸のチョウのクラフトを見て触って、子どもたちが自分で図鑑を完成させます。チョウの模様を描く塗り絵やクイズなども行い、いろいろな種類のチョウを学びます。そして、親子と学生と一緒に、森を散策しチョウを捕まえて観察します。その後、教室に戻って観察の振り返りし、チョウをもといた場所へ返すというプログラムになっています。

企画、運営を務めたのは、環境創生学科で北村講師の研究室に所属する4年生の青木理紗さん。「単なるお勉強ではなく、子どもたちにどうしたら面白ってもらえるかを考えました」

森の散策では、子どもたちは生き生きと元気いっぱいチョウと追いかけて。シジミチョウやセセリチョウなど小型のチョウが沢山見つかりました。「せっかくチョウを見つけても『チョウだ!』の一言で終わってしまってもったいないと思うのです。様々な種類のチョウが、どんな場所にいるか、どのような特徴があるのかなどを知ること、生物多様性への興味が増します。そのため、子どもたちが好きな塗り絵をアレンジして、実物大のチョウの塗り絵を1個1個準備しました。アゲハチョウを基本に、キアゲハの翅の模様はどう違うかなどを観察してもらいました」



ツマグロヒョウモン

アオスジアゲハ

子どもたちは一生懸命図鑑を作成します



チョウを探しつつ、ほかの生き物も見つけられます

## これからの環境教育に必要なこと

環境教育をテーマに研究をしている青木さんは、同様の親子参加型ワークショップを、東京や千葉でも行っていますが、地域によって参加者の反応が違うそうです。そのことも、これからの環境教育を考えるヒントとなっています。

「東京の子どもは普段、昆虫にふれあう機会が少ないので、最初はチョウに触れない子どももいます。でもそんな子どもも観察を通して興味を持ってくれるようになったのは嬉しかったです。また横浜では、自然を通して子どもの感受性を豊かにしたい、という人間教育を期待する親御さんが多くいらっしゃいました。子どもに対する環境教育は、保護者の意向も大きく影響します。最近はお母さんも増えていますが、虫も楽しいですよ、と保護者の皆さんの意識を変える努力も必要だと思っています。環境教育はあくまで自由参加ですが、自然に興味ある人だけじゃなく、興味がない人にもどうしたら参加してもらえるか工夫しながら考えていきたいです」と青木さん。

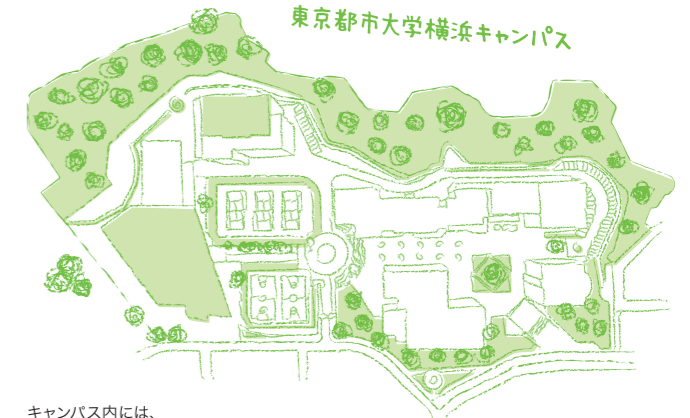
青木さんを見守る北村講師は、これからの環境教育について「伝えることが大事」と言います。「地域の交流を通して、学生たちが今までにない努力をするようになったのは嬉しい変化です。地域の環境教育では、研究者の中では当たり前のことも、知らない人たちにどうやって伝えるかが重要です。研究者は自分の世界に入り込む一方、人にうまく伝えることが不得意という人も多いものです。これからは知識を皆さんに伝える、インタープリターが必要です。緑豊かな横浜で、そうした人材も育って欲しいと思います」



青木さん

## 青木さんのメッセージ

チョウをきっかけに、身近な環境に目を向けてもらえればと思います。今回のプログラムを実施しました。黄色いチョウをみてもモンシロチョウと呼んでしまう子どもたちが、プログラムを通して「このチョウはなんだろう、どのチョウがどこにいるのだろう」と考えてくれるようになりました。また、はじめは虫を怖がっていた子が帰る頃には素手でチョウを捕まえられるようになりました。このような成長は自然体験ならではの経験だと思います。今回のプログラムが、横浜の環境や生き物に興味を持ち、考えるきっかけになっていたら嬉しいです。



キャンパス内には、横浜みどりアップ計画で推進している「緑地保全制度」を活用して保全した森があります



チョウを捕まえました!最後には森に戻します

## 参加した保護者の声

「本やテレビでは得られない体験がある」  
「自然に触れるいい機会になったと思った」  
「家の近所で貴重な体験ができる」

## Q. インタープリターとは?

**A** 自然解説を行う人。横浜市では、市民の方々に自然解説の技能を伝える講座、インタープリター養成講座を開催しています。